

留学生と日本人による漫才作成過程における 多文化共生への気づき

Awareness of Multiculturalism in the process of creating “Manzai”
by international students and Japanese students

立部 文崇
(徳山大学)

フランポネ
(吉本興業株式会社)

藤田 ゆみ
(吉本興業株式会社)

キーワード：多文化共生、漫才、地域ゼミ

1. はじめに

本稿は、徳山大学にて2021年度前期に実施された「地域ゼミⅠ（筆者担当ゼミ）」（以下、本地域ゼミ）に関して、授業内容の省察を行い、活動の成果と、次回以降へ向けての課題を明らかにしようという試みである。地域ゼミは、徳山大学2年次の必修科目に位置付けられており、同大学のミッションである大学が「地域の成長エンジン」となることを目指し、学生が地域の課題に教員とともに取り組み、3年次からの専門ゼミでひとりひとりが取り組むべき研究課題について考えることを目的としている。本稿で取り上げる本地域ゼミは、日本人学生と外国人留学生（以下、留学生）が、日本の文化のひとつである漫才づくりに取り組み、その成果を漫才イベントにて披露することを主な内容として、全15週にわたって実施された。本稿では、その企画から実施に至る一連の過程と全15週の活動内容を授業に参加した日本人学生、留学生を対象として実施したアンケート調査に基づき振り返る。

以下、第2章では、本地域ゼミの企画と実践に至った背景を確認し、本稿の問題意識と目的について述べる。第3章では、本地域ゼミの概要について述べる。そして第4章では、具体的な活動内容に加え、日本人学生、留学生の声に基づき振り返りを行う。最後に、第5

章にて、活動の全体的なまとめと結論について述べる。

2. 本地域ゼミにおける漫才づくり実施背景 2-1. 日本社会での外国人の受け入れの現状

現在、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により外国人の新規入国などには陰りが見られるものの日本社会において日本語を母語としない（以下、非母語話者）が日本社会で日常生活を営むことは珍しくなくなっている。その一方で日本の人口は2012年ごろをピークに減り続け、今後も出生率の低下による生産年齢人口の減少は進むと予想されている。このような背景から日本においては外国人労働者を増やす政策がつぎつぎと打ち出されている。記憶に新しいところでは、2019年4月の改正入管法による在留資格「特定技能」の新設であろう。これらの政策の結果、2020年12月末の法務省在留統計によると、日本に在留する外国籍人口は、288万7116人と右肩上がり増加している。全体を見れば、日本の総人口における外国人の占める割合は約2.33%であるが、2020年1月の日本全体での外国籍人口の年齢構成を見ると、生産年齢人口の割合は、85%と日本人人口の年齢構成における59%を大きく上回っている（法務省在

留統計)。これらの統計からは、岡田（2020）が指摘しているように「外国人の増加は日本で進行する人口減少だけでなく少子高齢化による若年労働力の減少も緩和している」と言える。

2-2. 今後、求められる取り組みと本地域ゼミにおける漫才づくりのねらい

前節で述べたように外国籍人口の増加が顕著に見られる日本社会ではあるが、この現状が、日本社会における多文化共生社会の実現に直結しているとは言い難いようである。愛知県半田市の多文化共生の現状について調査した祖父江（2021）は、「日本人と友達として付き合いがある」と答えた外国籍市民は60.3%であったとする一方で、「市内あるいは市外に外国人と友人としての付き合いがある」と答えた日本国籍市民は、7.7%にすぎなかったとしている。この結果からは、共生意識の高い特定の日本人が積極的に多くの外国籍市民と親しく付き合っている可能性が示唆されるとしている。この祖父江（2021）の指摘からは、日本社会での多文化共生社会の実現には、今後ますます日本人市民と非母語話者の交流機会を充実させていく必要性を感じさせる。また祖父江（2021）による日本国籍市民の調査では19歳以下あるいは20歳代から30歳代の若い日本国籍市民は積極的に交流したいと答えていたことも報告されており、増加傾向にある生産年齢人口世代の外国人とこの世代の日本人との交流の促進が今後の日本社会における多文化共生社会の実現に関わることが窺い知れる。

本稿で記述する2021年度前期に実施した本地域ゼミは、このような背景のもと今後の日

本社会を支える人財と考えられる生産年齢人口世代の日本人学生と留学生互いの理解の促進を目的として「漫才づくり」を企画、イベントを実施した。次章から本取り組みの概要について述べる。

3. 本地域ゼミの実践概要

3-1. 本地域ゼミの目的について

徳山大学で開講されている地域ゼミは、“地域に貢献できる人材の育成”をめざして、地域の地域問題の解決に取り組むことを目的に開講されている。これは、2020年度に開講された地域ゼミが以下のように地域課題をテーマにしていることからわかる。

(1) 2020年度、地域ゼミ開講テーマ（一部抜粋）

- ・ 中山間地域を見つめ直す
- ・ 勝手に観光協会～周南エリアの新たな観光資源を探し出し映像化
- ・ 東京五輪・パラリンピックに向けた防府市ホストタウン事業活性化
- ・ 周南市を題材にゲームアイデア企画
- ・ 小学校低学年対象の体育授業運営
- ・ 周南地域の農と食と自然を発信する
- ・ ボランティアによる子ども育成事業などの支援活動

など

本地域ゼミにおいても、多文化共生社会の実現に向けた多文化理解とともに、地域課題の解決をも目的としていた。本地域ゼミが目としたのは、駅前を中心とした市街地の活性化である。周南市は、現在第2期周南市中心市街地活性化基本計画を進めているところである。これに先立ち2018年2月には市民が集う場所として「徳山駅前図書館」が整備され

ている。この駅前図書館は、指定管理者であるカルチュア・コンビニエンス・クラブによって書店、カフェ、交流施設の管理、運営されている。2018年以降、現在もこの場所が中心となり市街地の活性化が進められている。本地域ゼミもこの中心市街地の活性化に寄与するため、多文化理解を目的とした「漫才づくり」の成果をこの駅前図書館のフリースペースにて漫才イベントを企画、実施することとした。

3-2. 本地域ゼミの活動概要

3-2-1 漫才づくりの指導について

本地域ゼミで実施した漫才づくりでは、吉本興業に所属の漫才コンビ「フランポネ」のおふたり、そして同じく吉本興業所属の「藤田ゆみ」さんにご協力いただいた。フランポネさんは、マヌーさん（日本人）とシラちゃんさん（スイス人）のコンビで、日本で唯一のフランス語で漫才ができる国際夫婦漫才コンビとして活動されている。また藤田さんは、スペイン語大好き芸人「日本のお笑いを南米へ」をテーマに活動されている。この3名のお笑い芸人の方々に漫才づくりのご指導をいただいた。フランポネさんと藤田さんは、本学のみならず多くの教育機関で「漫才で覚える日本語」をテーマに留学生を対象に漫才づくりの授業をされており、今回は徳山大学においてオンラインと対面を合わせて、4回の指導とイベントの企画、運営にご助力いただいた。

3-2-2 地域ゼミの活動スケジュール

地域ゼミは半期15回の授業科目である。4月から始まった本授業は以下のようなスケジュールで実施した。実際にフランポネさんと藤田さんにご指導いただいたのは、太字、下線の4回である。

4月14日	オリエンテーション
4月21日	<u>フランポネさん、藤田さんとオンラインで挨拶と漫才披露</u>
4月28日	コンビ、トリオ作りとイベント企画 班のグループ分けの実施 GWを挟み、コンビ、トリオで漫才の台本づくりを実施
5月12日	<u>フランポネさん、藤田さんからの漫才のつくり方講座実施(オンライン)</u>
5月19日	<u>フランポネさん、藤田さんからの漫才のつくり方講座実施(オンライン)</u>
5月26日	漫才の台本づくりと練習、イベント準備
6月2日	漫才の台本づくりと練習、イベント準備
6月9日	漫才の台本づくりと練習、イベント準備
6月16日	漫才の台本づくりと練習、イベント準備
6月23日	<u>フランポネさん、藤田さんから対面で漫才指導を実施</u>
6月30日	駅前図書館にてリハーサルの実施
7月7日	<u>駅前図書館にて爆笑お笑いフェス in TOKUYAMAを実施</u>
7月14日	漫才づくり、とイベントの振り返り
7月21日	成果発表会準備
7月28日	成果発表会準備
8月12日	地域ゼミ成果発表会 (YouTubeにて成果発表動画を公開)

3-2-3 漫才づくりの指導について

漫才づくりでは、オンライン3回、そして対面1回の漫才指導を受けた。まず1回目（4月21日）では、漫才が日本独自の文化であること、そして漫才を日本文化のコンテンツとして世界に知ってもらうことで異なる文化へ

の理解の促進につながるなどがこれまでの活動ともに紹介された。続く第2回では実際に漫才を作る過程についての指導を受けた。漫才の構成から自己紹介、ツカミ、ネタ入り、オチと漫才の大筋についてコンビ、トリオで学んだ。第3回は、漫才のオチについて改めて指導を受けるとともに、実際に作ってきた台本に助言をもらう流れで実施した。その後、コンビ・トリオで練習を重ね、「爆笑お笑いフェスin TOKUYAMA」を2週間後に控えた6月末に対面での漫才指導を受けた。この対面の指導においては、舞台への登場の方法、実際の漫才ではコンビ同士で話しているとしても観客に向けて話すことや声の張り方についての指導を受けた。以下の写真は、指導を受けた際のものである。



3-2-4 「爆笑お笑いフェスin TOKUYAMA」について

7月7日に4回の指導を受けた4組のコンビ

と2組とトリオが漫才を披露する「爆笑お笑いフェスin TOKUYAMA」を実施した。また当日は、日本人学生2名が司会を担当し、写真撮影をベトナム人留学生が担当、会場の補助を日本人学生2名で担当した。参加したコンビとトリオの構成は以下のとおりである。

(2) 漫才コンビ、トリオの構成

コンビ1：韓国人留学生（男）と日本人学生（男）

コンビ2：中国人留学生（男）と日本人学生（男）

コンビ3：ネパール人留学生（女）と日本人学生（女）

コンビ4：中国人留学生（男）と日本人学生（男）

トリオ1：ベトナム人留学生（女）と日本人学生2名（女）

トリオ2：モンゴル人留学生（男）と日本人学生2名（男）

以下のポスターは実際に当日の案内にも用いたポスターであるが、指導を受けた吉本興業所属の藤田さんにデザインをしていただいている。またイベントではポスターと同じデザインのTシャツを揃え、漫才を披露している。



イベント当日は、フランポネさん、藤田さんの3名にもご参加いただき漫才への講評、そして漫才自体も披露いただいた。



4. 漫才イベント後の学生の振り返り

漫才イベント終了後に、地域ゼミを受講した学生には、漫才づくりの過程、漫才イベントそのもの、そしてこの地域ゼミ全体についての感想を聞いている。本地域ゼミの目的である異なる文化への理解が促進されているか否か、また自身の考えに変化が生じているかどうかなどを中心に観察した。

(3) 漫才づくりの過程で見られた感想

- ・漫才のネタにする言い間違える言葉など考えることは難しかったけど、留学生が漫才を作ることが上手だったのでなんとか完成させることが出来たので良かったです。
- ・全然知らなかった日本人学生とコンビを組んで、仲良くなりながら、漫才を作る過程が留学生としてほばない機会だと思って非常に楽しくて珍しいと思いました。
- ・漫才づくりは、かなり考えたほうだと思います。題材を決めるとき何も決めれないのが、難しかったです。相方の〇〇さんとこの台本を声に出して読んだとき、自分では気づけなかった違和感や変な言い方を指摘されました。漫才づくりは台本を作るのは難しいですが、他の人の意見、特に海外の人からの意見がもらえるのは良かったです。

漫才づくりの過程への感想からは、留学生と日本人学生の間に意味交渉が行われていることが見られた。また「海外の人からの意見がもらえることがよかった」といった日本の文化という自文化であっても留学生からの意見を肯定的に受け取っていることが見て取れた。これらの点からは、漫才づくりにおいて、本地域ゼミが目的としたところの一端が達成できていると考えられた。

(4) 漫才イベントについて見られた感想

- ・漫才を見るのはもともと大好きでしたが、自分がする側になるとは思ってもいなかったです。イベント本番はとにかく大きな声で話す、セリフを忘れても臨機応変に対応するとベアの留学生と決めていました。本番では緊張しすぎてあまり覚えていませんが一番記憶に残っていることは、私がセリフを忘れてマイクの前で忘れたとつぶやいてしまったことです。でも、終わった後のやり切った感はずごく大きかったです。
- ・自分は考えるのとかが難しかったけど、他のグループは上手く日本と外国での違いをお笑いに活かしていたのが凄いなと思った。また、留学生は日本語上手やったけど発音など違って、いいなって思いました。
- ・発表当日は興奮と緊張がみなぎっていた。漫才が終わった時、とても楽しかったです。長い間の努力がやっと成果を見ました。

上記のイベントそのものへの感想からは、日本人学生、留学生がともにイベント自体を肯定的に捉えることができていること、また留学生の日本語への注視、関心などが寄せられており、異なる文化への興味関心が生じていることが感じ取れる。

(5) 本地域ゼミ全体への感想

- ・最初はなぜ漫才をしなければならないのか、なぜ漫才なのか、と嫌なことを思っていました。留学生の人たちと話したり、漫才づくりを一緒に作ったりすると、漫才も面白いなという気持ちも湧いてきました。このゼミを通して、今まではなかなか体験できない、海外との交流ということができました。日本の文化とは違う

文化、これに触れてみるというのもよかったです。

- ・最初は漫才なんてできるのかと不安だったけどチームのみんなと協力し、仲良くもなれて発表では緊張したけど、楽しく終わることができて良かったです。

本地域ゼミの活動のそのものに対する感想からは、突然、漫才づくりを行い、駅前の活性化イベントを実施すると告げられた学生の戸惑いが見られるが、活動の過程において、留学生との交流により新たな気づきを得ることができているとの意見も見られた。

5. 2021年前期地域ゼミ活動のまとめ

最後に記述したゼミの活動と感想のすべてを通して考察し、まとめておく。本地域ゼミは、今後の日本社会において必要とされる非母語話者と日本人住民との互いの理解の促進に寄与することを目的とした。その上で、これからの社会を背負う日本人大学生と留学生との間での多文化共生への気づきをどのように促すべきかを考えた。その気づきのきっかけとして、本地域ゼミでは日本の文化のひとつである「漫才」を取り入れ、留学生と日本人学生がともに漫才をつくり、発表するという活動を行った。これらの活動のなかでは、日本人学生、留学生ともに意見を交わすことができたことを良い経験であったとしており、また双方がこの活動を通して理解が深まったことが見て取れた。これらの結果からは、本地域ゼミの目的を達成できていると考えられる。しかしながら、その後、コンビやトリオを組んだ留学生と日本人の交流がいまま深まっているかという、そうではないコンビも見られる。これは今回の取り組みが、ただのきっかけでしかないことを示していると言える。

今後、大学のミッションとしてキャンパスから地域に多文化共生社会の実現による活性化を広げていくにあたっては、多文化共生に関わる取り組みをどのように継続的に実施していくのが課題と言える。

参考文献

- 法務省 (2020) 「在留外国人統計」
岡田豊 (2020) 「2019 年の外国籍住民人口は過去最高-2020年以降はコロナ禍での減少への対応が急務」みずほインサイト2020年9月号,みずほ総合研究所
千頭聡・カースティ祖父江 (2021) 「住民意識から見る多文化共生に向けての現状と課題」知多半島の歴史と現在,25,15-42